

地域活性化という「遊び」

63

京都市
福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。

移

住して間もない頃
子たちに大きくなったら何に
なりたい?と尋ねると
よく返ってきた答えが
鷹匠と鍛冶屋さん。

鷹匠はおいそれと

真似はできませんが

鍛冶屋さん

薪でお風呂を焚く時

五寸釘なんかを赤くなるまで熱して

金槌でトンテンカンとよくやっ

ました。

男の子なので

単純に刃物が好きという理由から

スタートしたのだとおもいますが

中学生くらいになると

炭火にプロアーで風を送りながら

鉄筋を熱し

実物大の日本刀のようなものまで

作ってしまうほど熱中したこともあ

ります。

そんなことをしているタイミングで

包丁研ぎの先生や砥石屋さんとの出
会いがあり

ますます刃物への関心が高まり

料理に使うための

和包丁やその研ぎにのめりこんでい

くわけですが

そこをまた掘り下げていくと

昔あこがれていた鍛冶屋さんという

存在が再登場。

鍛冶屋さんになりたいわけでは

ないけれど

大好きな刃物をもっと深く理解する

ためには

鍛冶屋さんの仕事を体験してみるこ

とは避けて通れない。

というわけで

農作業が忙しくなる直前

急遽高知の山奥にある体験施設を訪

高知の山奥で鍛冶体験

限界集落の現実と向き合う



真っ赤になった鋼材を叩くことだけで
包丁の形にしていきます。

れました。

そこでは1日ばかりで自分の好きな

刃物を鋼材から叩き作ります。

予備知識があったので

体験自体は大変スムーズ。

教えていただいた先生は

職人というより趣味人という感じの

とてもやさしい方でした。

体験の合間に

鍛冶屋になった経緯などいろいろ聞



出来上がった包丁。それぞれ1人1本ずつ。

出来上がった包丁に名前を刻みます。

かせていただいたのですがこれが大変ユニーク。最初は静かな田舎で暮らしたくて高知に移住され

アルバイトがてら鍛冶屋さんを手伝っておられたら師匠が急に亡くなられたためあとを継ぐことになったとのこと。しかし鍛冶屋さんというのはその技術の習得が非常に難しく

そして良い刃物を作ればそれが売れるかというところ100円均一でも包丁が売られている今の時代

手作りとなるとどうしても高価になりそれを売って生計を立てていくというのはそう簡単ではありません。近頃はものすごい腕を持つていながらも廃業されるところも多いそうです。師匠が亡くなられた時点ではそれなりの刃物ができるものまだまだ職人としては不十分。しかし



ついでに桂浜に寄り道。漫画『お〜い！竜馬』はみんなの愛読書でした。

もともと鍛冶職人を目指していたわけではなくただ高知の山奥で楽しく暮らしたいという本来の目的に立ち返り体験施設として出直したところこれが当たり。日本国内だけでなく海外からも日々体験希望の方がぞくぞくといらっしゃるようになったこと。コロナ禍においてもその人気は根強く海外からの来客は激減したものの在留米軍の方や国内に居住されている外国籍の方が遠方からたくさんいらつしやるそうです。鍛冶体験は高知の山村（おそらく限界集落）で斜陽産業といわれる鍛冶屋さんをユニークな発想でビジネスとして成立させ日々楽しく暮らしておられる姿を実際に見せていただいたことは子たちにとって大変有意義なことでした。これから限界集落の現実としっかり向き合っていこうという意識が芽生え始めた3人にとってはこちらの方が体験としては大きかったのではとおもいます。